

『帝国』論

宇波 彰

アントニオ・ネグリ、マイケル・ハートの『帝国』には、いくつかの「源泉」のようなものを認めることができるかもしれない。ただしそれは、ただ単に、先行する思想、あるいは同時代の思想からの影響とか、過去の文献の豊富な引用といった次元のことではない。この著作に存在しているのは、強烈な力を持っている思想が相互に融合し、縫合していく運動のプロセスである。それらの思想を縫合し、融合させていくものが、ネグリ、ハートの思想の力である。力のある思想は、もちろん単独でも強い影響力を持つことができるが、力を持ったほかの思想とぶつかり合い、それを自分の陣営に引きずり込み、場合によってはそれらの思想と格闘し、打倒することによって、さらに大きな力を獲得する。すでにくり返していわれているように、『帝国』のなかには、まず何よりもスピノザの思想が、いわば

うごめくように作動している。またフリーコーの権力論、ドゥルーズ、ガタリのリゾム、ノマドの概念もいたるところで力を発揮している。それらの概念的な思想は、単独でも強い力を持っているが、ネグリ、ハートによって『帝国』のなかで組み合わされ、重ね合わされることによって、さらに強力な思想になる。

それは何よりもネグリ、ハートが先行する思想家たちの思考に限りない信頼感を抱き、また一種の畏敬のようなものさえも持っているからである。ネグリのスピノザ論である『野生のアノマリー』を読んでいくと、「ここで驚くべきことには……」という表現が、折に触れて見られる(SVV9など。以下、『野生のアノマリー』を引用するときは、SVと略記し、そのあとに引用のページ数を示す)。また、ここが論述の「最高段階」

であるといった表現にもぶつかる。『野生のアノマリー』というスピノザ論のタイトルそのものに、すでにスピノザはネグリにとつて異様な哲学者だという意識が込められている。「野生」とは、英語では *savage* であり、「野蛮」の意味もある。 *anomaly* も「異常」という意味のことばである。ネグリは、このような野蛮で、異常なスピノザの思考に対して、ほとんど特異とも思えるほどの反応をする。それは、スピノザの思考があまりにも特異だからである。『野生のアノマリー』の冒頭から、ネグリはスピノザに対する感嘆のことばを惜しまない。「われわれに提示されているのは、絶対的な例外である」(SA5) というのが、ネグリのスピノザ評価である。また、ネグリはスピノザのテクストについて、このスピノザ論のなかで次のように書いている。「スピノザにおいては、議論のなかのひとつの論点が、絶対的なものに触れるたびごとに、ある熱狂が示されるのが普通である。その熱狂は、それらの論点が存在論的に完成されている、理論的にも充足している結論となる経験だということを思わせることができるものであった」(SA50)

つまりスピノザは自らの思考を展開していくときに、自分が納得できる結論になると熱狂的になるといつているのである。スピノザはしばしば「神に酔う哲学者」といわれてきた。スピノザは自らの思想にも陶醉し、熱狂する。ネグリはそのようなスピノザの情熱を感じることができた。このあたりをもう少し読み進んでいくと、次のような記述がある。「スピノザの

方法にある、呪縛するような性質は、探求を阻害できるものではない。出発点にある崇高な次元が、全体の探索を阻害することとはありえない」(SA50)

スピノザの方法は「呪縛力のある」真に魅惑的 (*spellbinding*) なものであり、スピノザの論述の始まりには崇高な (*sublime*) 次元が存在するのだ。「崇高」 (*sublime*) は、十八世紀において、エドモンド・バーク、カントによつて展開された概念であり、現代思想にとつても、芸術論にとつても、さらには、今村仁司がかつて論じたように、政治論においてもきわめて重要な役割を演じているものである。ネグリがはたしてこの「崇高」の概念をどこまで自分の思想のなかに取り込んでいったのかわからないが、少なくとも「崇高」がきわめて本質的な価値判断として用いられていることは明らかである。そしてネグリは、「意識の崇高な内面」が、スピノザの『知性改善論』に見出されるとする。ここで「崇高」ということばが用いられている点に注目しなくてはならない。こつういうネグリのテクストは、それを読む私自身にとつて、きわめて大きな驚きである。ネグリがスピノザに対して感じた驚きの方が、私がネグリに対して感じた驚きよりもはるかに大きなものである。それにもかかわらず、私はネグリのテクストに、崇高なものを感ずる。

ネグリのスピノザ論を読みつつ私が連想したのはアルチュセールの「マキャヴェリの孤独」である。アルチュセールは、マキャヴェリを「分類しがたい」思想家であるとし、「マキャ

ヴェリには、つねに、なにかつかみがたいものがある」(p.408)と書いている。マキャヴェリの思考は、「中断、脱線、未解決の矛盾を通じて前進する」(p.408)からである。アルチュセールは、マキャヴェリのテクストのなかに、「フロイトのいつた unheimlich なもの」の存在を認めるにいたる。福井和美による邦訳を見ると unheimlich はここでは「奇妙な親密さ、疎遠な近しさ」と訳されていて、その訳語はこの場合きわめて適切であるが、このドイツ語はフロイト、ハイデガーに関しては「不気味な」と訳される。フロイトは一九一九年の「不気味なものについて」において、ハイデガーは一九二七年の『存在と時間』において、それぞれこの概念について論じている。アルチュセールが「フロイトがいつた不気味なもの」というのは一九一九年のこの論文のことを指している。アルチュセールはマキャヴェリのテクストから「不気味な」印象を受けた。それはマキャヴェリの思考が、あまりにも「意表を衝く」ものだからである。これは、ネグリがスピノザのテクストに接して、ついに「崇高」なものを感知するのと似ている。すぐれたテクストは、それを本当に理解できる者にとっては崇高であり、不気味なものなのだ。崇高であったり、不気味でさえあるようなテクストは稀にしか存在しない。また、たとえそのようなテクストが存在したとしても、それを崇高もしくは不気味なものとして感じ取ることのできる主体がなくてはならない。両者の関係が成立してのみ、崇高ないし不気味なものが現れてくる。ネグ

リはさらにスピノザのテクストが「超人間的な緊張」を与えるものとさえ書いている。(SAG7)

このように、ネグリ、ハートの思考の基盤にはスピノザを初めとする何人かの思想家たちの思想が、力として働いている。そのような力の場から生み出されてきたものが、「帝国」の概念であり、「帝国」に対抗するものとしてのマルチチユード(集団大衆)の概念である。この二つの概念はベアになって存在しているが、この考え方の根底にあるのは、スピノザとともにフーコーであり、また、ドゥルーズ、ガタリの思想の力も見落としてはならない。まず何よりも、ネグリ、ハートの「共著」という『帝国』の生産のあり方それ自体が、ドゥルーズ、ガタリの共同作業のミメシスであることは明白である。哲学の歴史をひもといても、カントもヘーゲルもベルクソンもサルトルも、すべて「ひとり」の名前で著作を発表してきたのであり、過去の思想家のいずれにも「分類できない」とされたマキャヴェリも「孤独な」作業をしなくてはならなかった。ところが、ドゥルーズとガタリが一九七〇年ごろから行なった共同作業は、長い哲学の歴史に例を見ないものである。私が初めてネグリ、ハートの共著『ディオニソスの労働』を読んだとき、最初に想起したのは、『千のプラトール』の序に組み込まれた「リゾーム」の冒頭の一節である。「われわれは『アンチ・オイディプス』を二人で書いた。二人がそれぞれ数人であったから、それだけでももう多数になっていたわけだ。……われわれはもは

やわれわれ自身ではない。それぞれが自分なりの同志と知り合うことになる。われわれは援助され、吸い込まれ、多数化されたのである。」「(D15)すでに複数の存在であったドウルースとガタリが合体することによって、新たな多数体が作られたのである。

ネグリとハートが行なったことも、これと同じである。そして、二人が相互に融合し、縫合することによって「多数化」されるということが重要である。この「多数化」という概念は、ドウルース、ガタリとともにスピノザからも受け継がれたものであるが、その概念こそ、『帝国』を築く「マルチチュード」(多数者)を生むものである。

マルチチュードの概念

性急なよつであるが、私はここですぐに、いま述べた「マルチチュード」という考え方に入っていきたい。あらかじめ言うておくならば、この「マルチチュード」は、従来の「国民」(nation)や「民族」(people)とは対立する概念であって、国籍を超えた存在であり、つねに越境する者、永久のノマドである。いやむしろ「国境」などというものの存在を認めない者である。

『帝国』(以下引用するときはD15と略記し、そのあとに引用のページ数を示す。)の第四部「帝国の衰亡」では、異種族混交

(miscegenation)ということが使われている。このことは、特に白人と黒人との混交を意味するとされているが、もとよりネグリ、ハートはそれをもっと広い意味で使っている。マルチチュードは、異種族混交するノマドである。

越境者としてのマルチチュードという考え方は、すでにネグリ、ハートが一九九四年に刊行した『デュオニコソスの労働』(以下D17と略記する)において認めることができる。そこでは「主体性」という概念が論じられているが、ネグリ、ハートはその主体性について次のように書いている。「主体性の生産はつねにハイブリッド化のプロセスであり、越境(border crossing)である。そして、この主体のハイブリッドは、人間と機械のインターフェイスにおいて、しだいに生産されつつある。」「(D17)ここでの「主体性」についての考え方は、そのままマルチチュードについて妥当する。

この見解で注目すべきことは、主体性の生産が「人間と機械のインターフェイス」においてなされているということである。それはネグリ、ハートにおける「労働」についての見方から必然的に帰結されるものである。これは、彼らの認識では労働者自身が「大衆労働者から社会的労働者へ」と変化したからであり、社会そのものが、「フォード的社會から、コンピュータ化され、オートメーション化された社會へ」(D18)と変化したからである。さらに現代の労働は「情動的労働」へと変化していく。

マルチチユードという考え方はスピノザに基づくものであり、スピノザの『政治論』で示されている。そして、複合され、融合し、縫合されてようやく成立するのは、主体性のハイブリッド化に限定されるものではない。ネグリがスピノザにおいて発見したのは、あらゆる存在、世界そのものの多数性・集合性にほかならなかった。ネグリは、「世界は、特異性が多面的・複合的に組み合わされたもの」(SAG)と見ているからである。これはスピノザ哲学の基本である。「観念の秩序と結合は、事物の秩序と結合と同じである」(SAG)という考え方を基礎にしている。

「特異性が多面的・複合的に組み合わされた」世界は、「全体性と多様性との交感」(SAG)の世界、スピノザ的・汎神論的世界である。そして、このような組み合わせ、あるいは交感を可能にするものとして、ネグリは「芸術意欲」の概念を持ち込む。ネグリは次のように書いている。「ユートピアの論理的ネットワークは、全体性と多数性との交感を基盤とする。ユートピアを構築する決定的な選択(換言すれば芸術意欲)は、論理的な交感を、ひとつの理想的名ホモロジー(相同関係)ヒュポスタシス(実体)として確定する(SAG, 69)。「ややわかに、にくい表現ではあるが、全体的なもの、多様なもの、論理的なネットワーク、論理的な交感があり、それをまとめ上げる原動力、決定的に選択する力が「芸術意欲」である。ここでは「芸術意欲」という概念を提示したドイツの美術史家アロイ

ス・リーゲルの名は示されていない。しかし、リーゲルの考え方は、ベンヤミンにも、ドゥルーズにも受け継がれているのであって、ネグリがこの概念に言及するのは、ドゥルーズを媒介にしてであると推測できる。ネグリの思想に私はベンヤミンとの関連を感じているが、両者をつなぐ鍵はアロイス・リーゲルにあるのかもしれない。

帝国への侵入

いまや『帝国』そのものへと迫るときである。「帝国」という概念を形成する必要はどこから生じたか。ネグリ、ハートは次のように主張する。現代は「経済・文化の交換のグローバルゼーション」の時代であり、それに伴って新しい形態の「支配」(sovereignty)が求められる。それが「帝国」にほかならない。帝国は、世界を支配する支配的権力である。この帝国の第一の特徴は「領土」(テリトリー)が存在しないということである。『帝国』では、しばしば「脱領域化」ということが使われるが、これがドゥルーズ、ガタリの概念であることはいうまでもない。帝国には領土というものはなく、首都もない。「ポストモダンの帝国」にはローマは存在しない(EM317)。「いままでの国民国家は国境を失い、相互に浸透し、やがて消滅する運命にある。ポストモダンの帝国は、既存の国家が脱領域化

し、融合することによって成立する。

このように融合・縫合することによって成立する帝国では、いままでのように国境線によって区別されている政治的地図(geograph)は無効になり、新しい地形的地図(cathograph)が作られなくてはならない。そのような新しい地図を作る方法が考えられることになるが、それはガタリが『分裂分析的地図作成法』(邦訳、紀伊国屋書店)で展開した考え方にほかならない。それはさらに遡るならば、カフカの『城』に登場する測量師の仕事までたどり着くであろう。

帝国は国境を否定し、国境を超えて成立する。それを可能にしたものは、生産(産業)の変化である。ネグリ、ハートは、先行する思想家たちの仕事を十分に消化・評価するが、「生産」の問題が、フーコー、ドゥルーズ、ガタリにおいては十分に論じられていないと批判した上で(EM28)、「コミュニケーション産業の革命的な役割」を認めようとする。そしてネグリ、ハートは次のように書いている。「コミュニケーション産業は、イメージ界と記号界を生政治学的な組織のなかに組み入れるが、それは単にこの二つの領域を権力に奉仕させるためだけではなく、この組織の機能そのものに組み入れるためである。」(EM33)(ここで付言しておくが、ジャック・ラカンの概念としての「イメージ界」(リマジネール)は従来は「想像界」と訳され、「記号界」(ル・サンボリック)は「象徴界」と訳されてきたものである)(ここでネグリ、ハートによって語られている

ことは、従来の国家論、政治論とはまったく異なるものである。つまり、現代でかつてフランクフルト学派によって「文化産業」と名付けられ、イデオロギー国家装置とし機能していたものが、国を超えて「帝国」そのものになりつつある。

このようにして、「帝国」が成立する。帝国は国民国家という近代の国家概念を超えたところに存在する。そして、この「帝国」に対抗し、それを倒すのは、マルチチユードの仕事である。「帝国の力は、もはやマルチチユードの力を規制できない」(EM21)からである。ネグリ、ハートは、「雑種化、変異はそれら自体が帝國的主権によって用いられている方法そのものである」(EM26)と書いている。そして同時にこの方法は、帝国と対立し、それを打倒する使命を持つマルチチユードのものである。「王朝の本体そのものが、多様なかたちを持つていて、空間的に拡散している」(EM37)のである。このような、帝国とマルチチユードの共通の原型は、すでに少し触れておいたように、ドゥルーズ、ガタリのリゾーム、ノマドといった概念である。実際、『帝国』の中にはしばしば「リゾーム」や、「ノマド」ということはを発見することができる。ネグリ、ハートによると、現実の「帝国」は、ベトナム戦争以降の所産である。それは、リゾーム、ノマドなどの概念が流通していた時期と重なる。具体的には、一九八〇年代の「ワールドマーケット」の成立する時代であり、帝国の発展は、ソ連解体以後、一気に加速された。

ネグリ、ハートのマルチチユードに対する期待は非常に大きい。帝国に対抗できるのは、「プロレタリアートの多国籍的団結」(EM 263)である。これは「万国の労働者よ、団結せよ」の現代版であるように見える。ただし、「万国の労働者」という発想はネグリ、ハートにはありえないものである。かれらは国民国家というものを超えたところに「帝国」を考えているからである。「万国」はおそらく international の訳語であろう。また実際に今日でも「インターナショナル」が、中国の公式行事の会場で歌われている(二〇〇二年十一月のことである)。そうした国際的な時代は終わった。「労働運動の国際性の時代は終わった」(EM 50)のであり、現代のプロレタリアートは、「自分たちが国際的ではなく、グローバルであることを知っている」(EM 50)のである。帝国は、インターナショナルからグローバルへの転回の所産である。

労働者の側のグローバル性は支配側のグローバル性とパラレルになっていると理解すべきである。しかし両者は同じ価値を持つものではない。「帝国はマルチチユードの活動性の外側で生きている、捕捉のための装置にすぎない」(EM 62)からである。「帝国」においてネグリ、ハートは、アルチユセルに言及しつつ、マキアヴェリ、マルクスにもマルチチユードの概念があることを確認する。アルチユセルは、『君主論』『共産党宣言』がいずれも「宣言」であるとし、そこには「政治的なものはマルチチユードの運動である」(EM 63)とする共通の立

場があると主張しているからである。

それでは、「帝国」に対抗し、それを打倒する力としてのマルチチユードは、どのように作られ、また概念化されるのか。ネグリ、ハートは、「帝国」に対抗する「反帝国」(counter-empire)の概念を提示している(EM 267)。「反帝国」の先例は、ローマ帝国に対抗するものとしてのカトリックであり、アメリカ帝国に抵抗する、団結したアメリカの労働者である。ここでカトリックとは「普遍的」(universal)という意味だということコメントが付されていることに注意すべきである。もっとも、マキアヴェリの見解によると、キリスト教の導入によってローマ市民の土着的・民衆的信仰が崩壊したが、ローマ帝国崩壊の原因であり、そのことについてはネグリ、ハートも別のところで言及している。(EM 372)

とにかく、いわゆる「グローバル化」がマルチチユードを成立させる要件である。そして、労働者のグローバル化、多国籍化を可能にしてきたのは、労働の質的变化である。ネグリ、ハートは「情報化」(informatization)と「通常の辞書には載っていないことばを使っている。情報経済への移行が、労働の質を変化させる」(EM 289)。新しい労働は「情動的労働」(affective labor)と呼ばれる。それは、人間の相互関係にかかわる労働であり、現代の情報産業の発達にともなうて生じてきた労働である。この情動的労働が生み出すものが「生的な力」(biopower)にほかならない(EM 293)。「JJ」が使われている af-

ffective ということは、きわめてスピノザ的である。そのような新しい労働によって、マルチチユードが形成されるが、それと同時に「帝国」もまた強化されることになる。情報産業のグローバル化、それに伴う市場のグローバル化が帝国の基盤である。「世界市場の完全な出現は、帝国主義を必然的に終わらせる」(EM 333) のため。

帝国主義は、いままで存在していた国民国家のものであり、国家は、ネグリ、ハートによって次のように定義されている。「国家は、そこに帰属しているという感情などで成り立つだけではなく、おそらく第一に、法的・経済的な構造である」(EM 236) 国家は、そこに帰属しているという感情、つまり国民の国家意識、民族意識によって成り立つが、それだけではなく、あるいはそれ以上に、「法的・経済的構造」を基盤とする。実際に、既存の国家を超えたものである。この意味で、ガット、世界貿易機構などのグローバル的組織をネグリ、ハートは重視する。朝日新聞(二〇〇二年十一月十三日夕刊)に掲載されたマイケル・ハートのインタビュー(聞き手は長原豊)のなかでも、ハートは現代人がアメリカ帝国主義と、ネグリ、ハートがいう「帝国」との二者択一を迫られているとし、「帝国」は、「世界貿易機構、交際通貨基金、などの経済組織やG7に代表される主要国民国家、様々なNGOや多国籍企業が一体となって機能する、中心なきネットワーク」であると発言している。

ネグリ、ハートが分厚い『帝国』によって求めていることは二つある。ひとつは、現実に存在している「帝国」の本質の理解であり、もうひとつは、この帝国を打ち倒すマルチチユードへの期待である。「動的なマルチチユードは、グローバル市民にならなければならない」(EM 301) のであり、そのためには「ひとつの民族・国家に属しているという奴隷状態に対する問い」(EM 361) を押し進めなければならないのだ。

参考・引用文献

- A. Negri, *The savage anomaly*, University of Minnesota Press, 1991
- A. Negri, M. Hardt, *Labor of Divinity*, University of Minnesota Press, 1994
- A. Negri, *Empire*, Harvard University Press, 2000
- ルイ・アルチュセール、福井和美訳『マキアヴェリの孤独』(藤原書店、一九九九)
- ドゥルーズ、ガタリ、宇野邦一他訳『千のプラトー』(河出書房新社、一九九四)